

《論文》

# 『日本広東学習新語書』における 無気音・有気音の仮名表記

山村 敏江

## はじめに

神田外語大学神田佐野文庫所蔵『日本広東学習新語書』について、共同研究プロジェクトとして音韻面・語彙面の研究が進められている。『日本広東学習新語書』（以下『新語書』）は、明治32年（1899年）9月から同33年（1900年）2月に書かれた、日本人向けの「広東語<sup>(1)</sup>」（客家語）語彙・フレーズ集である。客家語の語彙・フレーズの下、あるいは右にカタカナで音注が付けられている。

台湾統治期、日本人による客家語の学習関係資料としては、野田岳陽の「廣東語」（『臺灣土語叢誌』，1901-1902，台北博文堂）が最初期のものとされるが<sup>(2)</sup>、『新語書』はそれを更に数年遡る。これは、19世紀末の言語状況や日本人の客家語学習状況に関する新たな発見につながるものとして、高い資料的価値を有していると言えよう。

本稿では、『新語書』に見られる仮名表記の一部を無気音・有気音に基づき分類、考察を行うこととする。

## 1. 台湾客家語とカタカナによる音注

日本統治期の台湾では、台湾語（ホーロー語<sup>(3)</sup>）や客家語を学習する日本人のための仮名表記が作成され、これらを使用した学習書や辞書が刊行された。

この仮名表記はカタカナを利用したものだが、そもそも言語的に別系統にあるホーロー語・客家語音を、日本語を表記するための仮名で表そうとすれば、様々な問題が生じるのは想像に難くない。結局、仮名のみではその実際の音を

表しきれないため、補助記号を付した符号仮名<sup>(4)</sup>を考案するなど様々な方法でこの問題の解決が試みられた。

ホーロー語については、台湾統治のごく初期から、カタカナによる音注の施された書籍が各種刊行された。1901年に漳州語から廈門語へと依拠する音が変わられ<sup>(5)</sup>、それに伴う改訂を経て、最終的に依拠すべき統一的な基準と認識されるに至った。

それに対し客家語の音注については、統一的な基準は存在しなかったことが、いくつかの資料から見て取れる<sup>(6)</sup>。そもそも、専用のものが作成されたわけではなく、ホーロー語のために作成された仮名表記を客家語に転用したのである。

上述の通り、台湾統治期における日本人による客家語の学習関係資料としては、野田岳陽の「廣東語」(『臺灣土語叢誌』, 1901-1902, 台北博文堂)が最初期のものとされる。その後、『廣東語會話篇』(1915年, 志波吉太郎編著, 台湾日々新聞社)、月刊『語苑』(第15巻第4号(1922)~第29巻第12号(1936)、台湾語通信研究會)などが刊行されたが<sup>(7)</sup>、客家語の仮名表記について、統一的な基準は存在しなかったようである。

## 2. 無気音・有気音の仮名表記

台湾客家語の声母において無気音と有気音の対立があるのは、閉鎖音・閉鎖摩擦音の p - p<sup>h</sup>、t - t<sup>h</sup>、k - k<sup>h</sup>、ts - ts<sup>h</sup> (海陸音はさらに tʃ - tʃ<sup>h</sup>) である。これらを仮名で表記する場合、台湾総督府関係の資料や刊行物では無気音は清音、有気音は「ㄗ」のように、清音の仮名の下に「・」という補助記号を付けるのが一般的である。これは、台湾総督府『廣東語辞典』(1932)の凡例で「出氣音符號」とされるものである。「出氣音ハ カハア (kha) キヒイ (khi) 等ノ如ク常ニハ行音ヲ伴ヒテ發音セラル。」<sup>(8)</sup>と説明されることから、これが有気音を意味することが分かる。また、臨時台湾戸口調査部による『明治三十八年 戸口調査用語 (廣東語)』(1905)にも同様の補助記号が見られる。この資料に凡例はないが、用例から有気音を表すものと判断できる。一方、『新語書』にはこの種の補助記号は見られない。

また別に、清音の仮名に半濁点「゜」を付けて有気音を表す方法も存在す

る。例えば、「廣東語」（『臺灣土語叢誌』）では、有気音を表す符号仮名として「チ<sup>°</sup>、ツ<sup>°</sup>、テ<sup>°</sup>、ト<sup>°</sup>」が使われている。

『新語書』では、原則として無気音・有気音のどちらも清音で表記される。しかし、舌頭音のみ半濁点「<sup>°</sup>」を附した仮名表記が見られる。ただし、「タ<sup>°</sup>」はなく、「テ<sup>°</sup>」あるいは「ト<sup>°</sup>」のみである。これらを四県音・海陸音と照らし合わせても、無気音と有気音の双方に現れるため、実際に有気音を表すものと断定できない。しかし、その使用状況から何らかの傾向を見出すことができるはずである。

本節では、『新語書』より「テ／テ<sup>°</sup>」あるいは「ト／ト<sup>°</sup>」で始まる仮名表記を抽出し、それを十六撰によって分けた後、特に無気音と有気音という観点から実際の字音と比較・考察を行う。舌頭音については、四県音・海陸音で共通の声母・韻母を持つため、表中では四県音のみ記すこととする。同一撰内での配列は、開合→等位→声調→韻目→声母の順に従う。仮名表記の後ろに書かれる漢数字は、当該仮名表記の初出の冊数を表す。「(十一附)」は、第十一冊の奥付の後にある附録を表す。

なお、『新語書』には声調表記がないため、調類・調値については考察対象としない。従って、本節では声調について言及しない。

四県音・海陸音の字音は《教育部 臺灣客家語常用詞辭典》によるが、未収録の字音については《中央研究院語言學研究所 客英大辭典查詢》を参照した。表中で「客英」と書かれているものである。また、ホーロー語の字音は全て《教育部 臺灣閩南語常用詞辭典》による。

## 2.1 清音表記のみ

客家語において中古音の全濁音は、閉鎖音・閉鎖摩擦音では声調を問わず有気音となるため、定母字は原則として有気音として発音される。その結果、客家語は有気音の字が多くなる傾向にある。以下、清音表記のみ見られる字を示すが、実際には有気音で発音される字が多数ある。

### 2. 1. 1 通撮

	新語書	四県音	開合	等位	声調	韻目	声母
峒	トン (三)	客英 thûng	合	一	平	東	定
瞳	トン (十)	客英 thûng	合	一	平	東	定
冬	トン (一)	tun	合	一	平	冬	端
苳	トン (十一附)	客英 tung	合	一	平	冬	端
讀	トッ・トク (一) トック (八)	t <sup>h</sup> uk	合	一	入	屋	定
獨	トッ・トク (一)	t <sup>h</sup> uk	合	一	入	屋	定

### 2. 1. 2 江撮

	新語書	四県音	開合	等位	声調	韻目	声母
撞	トン (二)	ts <sup>h</sup> on	開	二	去	絳	澄

・「撞：トン」は、ホーロー語 tən (陽去声) の影響が考えられる。

### 2. 1. 3 遇撮

	新語書	四県音	開合	等位	声調	韻目	声母
圖	トー (一)	t <sup>h</sup> u	合	一	平	模	定
徒	トー (八)	t <sup>h</sup> u	合	一	平	模	定
猪	トー (一)	tsu	合	三	平	魚	知

・「猪：トー」は、ホーロー語 tu (陰平声) の影響が考えられる。

### 2. 1. 4 蟹撮

	新語書	四県音	開合	等位	声調	韻目	声母
苔	トイ (十)	t <sup>h</sup> oi	開	一	平	哈	定
袋	トイ (二) トオイ (十一)	t <sup>h</sup> oi	開	一	去	代	定

## 2.1.5 臻摂

	新語書	四県音	開合	等位	声調	韻目	声母
吞	トウン (一) トン (二)	t <sup>h</sup> un	開	一	平	痕	透
敦	トン (八)	tun	合	一	平	魂	端
墩	トイ (十一附)	tun	合	一	平	魂	端
凸	トン (一)	t <sup>h</sup> iet/t <sup>h</sup> ut	合	一	入	沒	透

- ・「墩：トイ」は、何を反映するものか不明である。
- ・「凸：トン」は、何を反映するものか不明である。

## 2.1.6 山摂

	新語書	四県音	開合	等位	声調	韻目	声母
展	テン (五)	tien 白	開	三	上	獮	知
顛	テン (二)	tien	開	四	平	先	端
殿	テアン (八)	t <sup>h</sup> ien	開	四	去	霰	定
跌	テッ (一)	tiet	開	四	入	屑	定
端	トン (八) トーン (十一附)	ton	合	一	平	桓	端
斷	トワン・トーン (一)	ton	合	一	上	緩	定
	トツツ (五)	ton	合	一	去	換	端
	トアン・トン (六)						
短	トン (一)	ton	合	一	上	緩	端
緞	トーン (一)	t <sup>h</sup> on	合	一	去	換	定
奪	トツ (十一附)	客英 tho <sup>t</sup>	合	一	入	末	定

- ・「斷：トワン・トアン」は、ホーロー語 tuan (陰去声) の影響が考えられる。「トツツ」は何を反映するものか不明である。

### 2.1.7 效摂

	新語書	四県音	開合	等位	声調	韻目	声母
刀	ト一 (一)	to	開	一	平	豪	端
叨	ト一 (十一)	to	開	一	平	豪	透
桃	ト一 (一)	t <sup>h</sup> o	開	一	平	豪	定
萄	ト一 (十)	t <sup>h</sup> o	開	一	平	豪	定
倒	ト一 (一)	to	開	一	上	皓	端
		to	開	一	去	号	端
島	ト一 (六)	to	開	一	上	皓	端
討	ト一 (一)	t <sup>h</sup> o	開	一	上	皓	透
道	ト一 (四) トン (八)	t <sup>h</sup> o	開	一	上	皓	定
稻	ト一 (八)	t <sup>h</sup> o	開	一	上	皓	定
套	ト一 (一)	t <sup>h</sup> o	開	一	去	号	透
導	ト一 (二)	t <sup>h</sup> o	開	一	去	号	定
盜	ト一 (十一)	t <sup>h</sup> o	開	一	去	号	定
蹈	ト一 (九)	客英 thau thàu	開	一	去	号	定
罩	テウ (四)	tsau	開	二	去	效	知

- ・「道：トン」は、何を反映するものか不明である。
- ・「蹈：ト一」は、ホーロー語 tɔ (陽去声) の影響が考えられる。
- ・「罩：テウ」は、何を反映するものか不明である。

### 2.1.8 果摂

	新語書	四県音	開合	等位	声調	韻目	声母
多	ト一 (一)	to	開	一	平	歌	端
駝	ト一 (十)	t <sup>h</sup> o	開	一	平	歌	定
舵	ト一 (七)	t <sup>h</sup> o	開	一	上	哿	定
躲	ト一 (二)	to	合	一	上	果	端
妥	ト一 (四)	t <sup>h</sup> o	合	一	上	果	透
惰	ト一 (一)	t <sup>h</sup> o	合	一	上	果	定

## 2. 1. 9 宕摂

	新語書	四県音	開合	等位	声調	韻目	声母
當	トン (一)	toŋ	開	一	平	唐	端
		toŋ	開	一	去	宕	端
堂	トン (二)	tʰoŋ	開	一	平	唐	定
塘	トン (十一附)	tʰoŋ	開	一	平	唐	定
黨	トン (一)	toŋ	開	一	上	蕩	端
擋	トン (八)	toŋ	開	一	去	宕	端
托	トッ (二)	tʰok	開	一	入	鐸	透

## 2. 1. 10 梗摂

	新語書	四県音	開合	等位	声調	韻目	声母
擲	テッ (二)	tep	開	三	入	昔	澄
釘	テン (六)	taŋ	開	四	平	青	端
丁	テン (十一)	ten	開	四	平	青	端
聽	タン・テン (二)	tʰaŋ	開	四	平	青	透
踢	テッ (二)	tʰet	開	四	入	錫	透
剔	テッ (二)	客英 thit	開	四	入	錫	透

・「釘：テン」は、客英に tang、ten との記載がある。

## 2. 1. 11 曾摂

	新語書	四県音	開合	等位	声調	韻目	声母
燈	テン (一)	ten	開	一	平	登	端
灯	テン (二)						
藤	テン (十)	tʰen	開	一	平	登	定
籐 <sup>(9)</sup>	テン (十)	客英 thèn	開	一	平	登	定
等	テン (一)	ten	開	一	上	等	端
徳	テッ (二)	tet	開	一	入	徳	端

## 2. 1. 12 流摂

	新語書	四県音	開合	等位	声調	韻目	声母
儉	テウ (二)	t <sup>h</sup> eu	開	一	平	侯	透
投	テウ (一)	t <sup>h</sup> eu	開	一	平	侯	定
頭	テウ (一)	t <sup>h</sup> eu	開	一	平	侯	定
斗	テウ (一)	teu	開	一	上	厚	端
鬪	テウ (六)	客英 t <sup>h</sup> eu	開	一	去	候	端
透	テウ (三)	t <sup>h</sup> eu	開	一	去	候	透
豆	テウ (五)	t <sup>h</sup> eu	開	一	去	候	定
荳	テウ (一)	客英 th <sup>h</sup> eu	開	一	去	候	定
痘	テウ (十一)	t <sup>h</sup> eu	開	一	去	候	定
鬥	タウ・トー (二)	teu	開	一	去	候	端

・「鬥：タウ」はホーロー語 tau (白話音：陽去声)、「トー」は to (文言音：陽去声) の影響が考えられる。

## 2. 2 半濁点付き表記のみ

以下、半濁音付き表記のみ見られる字を示すが、実際には無気音で発音される字と有気音で発音される字が混在している。

### 2. 2. 1 通摂

	新語書	四県音	開合	等位	声調	韻目	声母
銅	ト <sup>h</sup> ーン (十)	t <sup>h</sup> uŋ	合	一	平	東	定
董	ト <sup>h</sup> ン (十一)	tuŋ	合	一	上	董	端
棟	ト <sup>h</sup> ン (十)	tuŋ	合	一	去	送	端
統	ト <sup>h</sup> ン (十一)	t <sup>h</sup> uŋ	合	一	去	宋	透
洞	ト <sup>h</sup> ーン (十)	t <sup>h</sup> uŋ	合	一	去	送	定

### 2. 2. 2 止摂

	新語書	四県音	開合	等位	声調	韻目	声母
蜘蛛	テ <sup>h</sup> ー (十)	ti	開	三	平	支	知
匙	テ <sup>h</sup> ー・シー (十)	ts <sup>h</sup> i	開	三	平	支	禪



・「匙：テ°ー」は、何を反映するものか不明である。なお「シー」については、海陸音  $\text{ɿ}$  の反映と考えられる。

### 2.2.3 遇撰

	新語書	四県音	開合	等位	声調	韻目	声母
屠	ト°ー (十一)	$t^h u$	合	一	平	模	定
堵	ト°ー (十)	$t u$	合	一	上	姥	端
肚	ト°ー (七)	$t u$	合	一	上	姥	定
妬	ト°ー (十)	$t u$	合	一	去	暮	端

### 2.2.4 蟹攝

	新語書	四県音	開合	等位	声調	韻目	声母
待	ト°イ (九)	$t^h a i$	開	一	上	海	定
堤	テ°ー (六)	$t^h i$	開	四	平	齊	端
題	テ°ー (八)	$t^h i$	開	四	平	齊	定
抵	テ°ー (八)	$t i$	開	四	上	薺	端
體	テ°ー (九)	$t^h i$	開	四	上	薺	透
体	テ°ー (九)						
蒂	テ°ー (十)	$t i$	開	四	去	霽	端
剃	テ°ー (二)	$t^h i$	開	四	去	霽	透
第	テ°ー (一) テ°イ (三)	$t^h i$	開	四	去	霽	定

・「待：ト°イ」については、広州語  $\text{doi}$  (陽去声) の影響が考えられるかもしれない。

### 2.2.5 臻攝

	新語書	四県音	開合	等位	声調	韻目	声母
墩	ト°ン (十一)	$t u n$	合	一	平	魂	端
豚	ト°ウン (十)	$t^h u n$	合	一	平	魂	定

## 2.2.6 山撮

	新語書	四県音	開合	等位	声調	韻目	声母
癩	テ°アン (十一)	tien	開	四	平	先	端
填	テ°ヤン (五)	thien	開	四	平	先	定

## 2.2.7 效撮

	新語書	四県音	開合	等位	声調	韻目	声母
貂	テ°アウ (十)	tiau	開	四	平	蕭	端
雕	テ°ヤウ (十一)	tiau	開	四	平	蕭	端
條	テ°ヤウ (一)	thiau	開	四	平	蕭	定
調	テ°ヤウ (八)	thiau	開	四	平	蕭	定
		thiau	開	四	去	嘯	定
吊	テ°アウ・テ°ヤウ (十)	tiau	開	四	去	嘯	端
跳	テ°ヤウ (六)	thiau	開	四	去	嘯	透

## 2.2.8 梗撮

	新語書	四県音	開合	等位	声調	韻目	声母
停	テ°ン (二)	thin	開	四	平	青	定
	ト°ン (十一附)						
亭	テ°イン (九)	thin	開	四	平	青	定
	テ°ーン (十一附)						
定	テ°イン (一)	thin	開	四	去	徑	定
	テ°イー (四)						
	テ°ーン (十一)						
錠	テ°ーン (十一)	客英 thin	開	四	去	徑	定
敵	テ°ッ (十)	thit	開	四	入	錫	定

・「停：ト°ン」は、「頓」を表す一種の訓読と考えられるかもしれない。

2.3.5. に「頓：テ°ン」という表記があることが参考になる。

## 2.2.9 流撮

	新語書	四県音	開合	等位	声調	韻目	声母
肘	テ°ユー (十)	客英 tsíu	開	三	上	有	知

・「肘：テ°ユー」は、ホーロー語 tiu（陰上声）の影響が考えられる。

### 2. 2. 10 深摂

	新語書	四県音	開合	等位	声調	韻目	声母
砧	テ°アム（十一）	tiam	開	三	平	侵	知

### 2. 2. 11 咸摂

	新語書	四県音	開合	等位	声調	韻目	声母
站	テ°ヤム（二）テ°アム（五）	tsam	開	二	去	陷	知
添	テ°ツヤム（一） テ°ン・テ°ヤム（五） テ°アム（六）	tʰiam	開	四	平	添	透
甜	テ°ヤン（二）テ°アム（四）	tʰiam	開	四	平	添	定
忝	テ°アム（八）	tʰiam	開	四	上	忝	透
貼	テ°ヤフ（一）テ°ヨツ（七）	tʰiap	開	四	入	帖	透
磔	テ°ヤウ（一）テ°ヤツ（十）	tʰiap	開	四	入	帖	定
蝶	テ°ヤウ（十）	tʰiap	開	四	入	帖	定

・「站：テ°アム／テ°ヤム」は、何を反映するものか不明である。

・「磔：テ°ヤウ」「蝶：テ°ヤウ」は、後続する音の影響による韻尾の弱化を反映するものと考えられる。

## 2. 3 清音表記・半濁点付き表記

以下、清音表記・半濁点付き表記の双方が見られる字を示すが、このグループも無気音で発音される字と有気音で発音される字が混在している。

### 2.3.1 通摂

	新語書	四県音	開合	等位	声調	韻目	声母
東	トシ (一) / トシ (十一)	tuj	合	一	平	東	端
通	トシ (七) / トシ (六)	t <sup>h</sup> uj	合	一	平	東	透
同	トシ (三) / トシ (六)	t <sup>h</sup> uj	合	一	平	東	定
童	トシ (二) / トシ (六)	t <sup>h</sup> uj	合	一	平	東	定
桐	トシ (十一) / トシ (十)	t <sup>h</sup> uj	合	一	平	東	定
筒	トシ (十) / トシ (十一)	t <sup>h</sup> uj	合	一	平	東	定
疼	トシ (九) / トシ (十一)	客英 thung tung	合	一	平	冬	定
桶	トシ (一) / トシ (十)	t <sup>h</sup> uj	合	一	上	董	透
動	トシ (二) / トシ (十)	t <sup>h</sup> uj	合	一	上	董	定
凍	トシ (二) / トシ (十)	tuj	合	一	去	送	端
痛	トシ (一) / トシ (九)	t <sup>h</sup> uj	合	一	去	送	透
督	トッ (八) / トッ (十一)	tuk	合	一	入	沃	端
毒	トッ (七) / トッ (十)	t <sup>h</sup> uk	合	一	入	沃	定

### 2.3.2 止摂

	新語書	四県音	開合	等位	声調	韻目	声母
知	テイ (一) / テ (一) テ <sup>イ</sup> ・テ <sup>イ</sup> (二)	ti	開	三	平	支	知
地	テ (二) / テ (一) テ <sup>イ</sup> (二)	t <sup>h</sup> i	開	三	去	至	定

### 2.3.3 遇摂

	新語書	四県音	開合	等位	声調	韻目	声母
都	ト (三) / ト (六)	tu	合	一	平	模	端
塗	ト (一) / ト (五)	t <sup>h</sup> u	合	一	平	模	定
賭	ト (一) / ト (九)	tu	合	一	上	姥	端
土	ト (一) / ト (三)	t <sup>h</sup> u	合	一	上	姥	透
吐	ト (一) / ト (七)	客英 thu	合 合	一 一	上 去	姥 暮	透 透
兔	トウ (一) / ト (十)	t <sup>h</sup> u	合	一	去	暮	透

度	トー (一) / ト° (六)	t <sup>h</sup> u	合	一	去	暮	定
渡	トー (七) / ト° (十一)	t <sup>h</sup> u	合	一	去	暮	定

## 2.3.4 蟹攝

	新語書	四県音	開合	等位	声調	韻目	声母
臺	トイ・タイ (三) / ト°イ (十一)	t <sup>h</sup> oi	開	一	平	哈	定
台	タイ (二)						
代	トッイ (一) トイ (二) タイ (四) トオイ (十一) / ト°ウイ (八)	t <sup>h</sup> oi	開	一	去	代	定
梯	トウイ (五) トイ (十) / ト°ウイ (十)	t <sup>h</sup> oi	開	四	平	齊	透
提	テー (一) / テ°イー・ テ°ー・テ°イ (一)	t <sup>h</sup> i	開	四	平	齊	定
弟	テイ (二) テー (八) / テ°ー・テ°イ (三)	t <sup>h</sup> i	開	四	上	齊	定
堆	トウイ (一) トイ・トッイ (七) / ト°ウイ (九)	toi	合	一	平	灰	端
腿	トウイ (一) / ト°ウイ (七) ト°イ (十)	t <sup>h</sup> ui	合	一	上	賄	透
對	トウイ・トイ (一) / ト°ウイ (六) ト°イ (十一附)	ti/tui	合	一	去	隊	端
退	トイ (二) タイ (十) トウイ (十一附) / ト°ウイ (八) ト°ッイ (九)	t <sup>h</sup> ui	合	一	去	隊	透
兌	トウイ (八) トイ (十一) / ト°ウイ (八)	tui	合	一	去	泰	定

・「臺／台：タイ」は、ホーロー語 tai (陽平声) の影響が考えられる。

・「代：タイ」は、ホーロー語 tai (陽去声) の影響が考えられる。

### 2.3.5 臻摂

	新語書	四県音	開合	等位	声調	韻目	声母
頓	トン (五) / テン (二)	tun	合	一	去	恩	端

・「頓：テン」は、「停」を表す一種の訓読と考えられるかもしれない。

2.2.8に「停：トン」という表記があることが参考になる。

### 2.3.6 山摂

	新語書	四県音	開合	等位	声調	韻目	声母
天	テン (一) テアン (六) / テ <sup>o</sup> アン (三) テン (六) テ <sup>o</sup> ヤン (七) テ <sup>o</sup> エン (十一)	thien	開	四	平	先	透
田	テアン (八) / テ <sup>o</sup> アン (一) テン (三)	thien	開	四	平	先	定
典	テヤン (六) / テ <sup>o</sup> アン (六) テ <sup>o</sup> ヤン (十一附)	tien	開	四	上	銑	端
電	テアン・テン (八) / テ <sup>o</sup> エン (二) テ <sup>o</sup> アン (三) テ <sup>o</sup> ヤン (十一)	thien	開	四	去	霰	定
鐵	テッ (二) テヤッ (十) / テ <sup>o</sup> ヤッ (六)	thiet	開	四	入	屑	透
鉄	テ <sup>o</sup> ヤッ (十)						
脱	トイ (一) トッ (二) / ト <sup>o</sup> ウイ (七) トッ (十)	thot	合	一	入	末	透

・「脱：トイ／ト<sup>o</sup>ウイ」は、何を反映するものか不明である。

## 2.3.7 效摂

	新語書	四県音	開合	等位	声調	韻目	声母
到	トウー (一) トー (二) タウ (八) / トー (三)	to	開	一	去	号	端
鳥	テヤウ (十) / テ°ヤウ・テッヤウ (一)	tiau	開	四	上	篠	端
挑	テヤウ (六) / テ°ヤウ (九)	t <sup>h</sup> iau	開	四	上	篠	定
釣	テヤウ (六) / テ°ヤウ (二)	tiau	開	四	去	嘯	端

・「到：タウ」は、ホーロー語 tau (白話音：陰去声) の影響が考えられる。

## 2.3.8 宕摂

	新語書	四県音	開合	等位	声調	韻目	声母
湯	トン (四) / ト°ン (六)	t <sup>h</sup> oŋ	開	一	平	唐	透
糖	タン (一) トホン (四) トーン (十) / ト°ン (五)	t <sup>h</sup> oŋ	開	一	平	唐	定

・「糖：タン」は、官話の影響が考えられる。

また、「トホン」という表記は注目に値する。この種の仮名表記は他に見られないが、有気音を明確に表記するための創意工夫を窺わせるものである。

## 2.3.9 梗摂

	新語書	四県音	開合	等位	声調	韻目	声母
的	テ (一) テッ (二) / テ°ッ (一)	tit	開	四	入	錫	端

## 2.3.10 曾摂

	新語書	四県音	開合	等位	声調	韻目	声母
得	テッ (二) / テ°ッ (一)	tet	開	一	入	徳	端
特	テッ (二) / テ°ッ (一)	t <sup>h</sup> it	開	一	入	徳	定

### 2.3.11 咸摂

	新語書	四県音	開合	等位	声調	韻目	声母
點	テヤム (二) ／テ°ヤム (一) テ°アム (五)	tiam	開	四	上	忝	端
点	テヤム・テン (一) テアム (三) ／テ°ヤム (一) テ°アム (三)						
店	テアム (三) ／テ°ヤム (一) テ°アム (四)	tiam	開	四	去	椽	端

### 2.4 小結

以上、「テ／テ°」あるいは「ト／ト°」で始まる仮名表記を抽出し、四県音と比較・考察を行った。これらを陰声韻・陽声韻・入声韻の三つに分けた上で音節表としてまとめ、以下に示す。「t」・「tʰ」のどちらも、枠の上段にあるのが「テ」・「ト」で始まる音節、下段が「テ°」「ト°」で始まる音節である。組み合わせとしては、

- ①四県音は無気音－清音表記
- ②四県音は無気音－半濁点付き表記
- ③四県音は有気音－清音表記
- ④四県音は有気音－半濁点付き表記

以上の四通りである。



## 2.4.1 陰声韻

	i	o	u	ai	oi	ui	eu	iau
t	テー トウ タウ	ト トウ タウ	ト		トイ トウイ トツイ	トイ トウイ	テウ	テヤウ
	テ° テ°イ テ°イー	ト° ト°ウ ト°ウイ	ト°		ト°ウイ ト°イ ト°ウイ	ト°イ ト°ウイ		テ°アウ テ°ヤウ テ°ツヤウ
th	テー テイ	ト トン	ト トウ		トイ トオイ トウイ トツイ タイ	トイ トウイ タイ	テウ	テヤウ
	テ° テ°イ テ°イー		ト° ト°ウ	ト°イ	ト°イ ト°ウイ	ト°ウイ ト°ツイ		テ°アウ テ°ヤウ

①～④全ての組み合わせが出現するため、明確な傾向を述べるのが難しい。強いて言うなら、舌面の高い“i-”や“u-”では、無気音・有気音の違いを問わず半濁点付き表記が見られるが、それより舌面の低い“e-”では清音表記のみという差異がある。

## 2.4.2 陽声韻

	in	en	on	un	oŋ	uŋ	iam	ien
t		テン	トン トーン トアン トワン トツツ	トン	トン	トン	テン テアム テヤム	テン テヤン
			テ <sup>ン</sup>		ト <sup>ン</sup>	テ <sup>アム</sup> テ <sup>ヤム</sup>	テ <sup>アン</sup> テ <sup>ヤン</sup>	
t <sup>h</sup>		テン	トーン	トン トウン	トン トーン トホン タン	トン	テヤン	テン テアン
	テ <sup>ン</sup> テ <sup>ーン</sup> テ <sup>イン</sup> テ <sup>イー</sup> ト <sup>ン</sup>			ト <sup>ン</sup> ト <sup>ウン</sup>	ト <sup>ン</sup>	ト <sup>ーン</sup>	テ <sup>ン</sup> テ <sup>アム</sup> テ <sup>ヤム</sup> テ <sup>ッヤム</sup>	テ <sup>ン</sup> テ <sup>アン</sup> テ <sup>エン</sup> テ <sup>ヤン</sup>

上述の陰声韻と同様、舌面の低い“e-”では清音表記のみであり、“o-”も不完全ながら同様の傾向が見られると言えよう。

また、2.3.8. で述べたように、「糖：トホン」という表記は注目に値する。清音表記に分類したものの、喉音「ホ」との組み合わせにより、有気音であることが明確に示されている。

## 2.4.3 入声韻

	it	et	ot	ok	uk	iap	iet
t		テッ			トッ		テッ
					ト <sup>ッ</sup>		
t <sup>h</sup>	テ テッ	テッ	トッ トイ	トッ	トッ トク トック		テッ テヤッ
	テ <sup>ッ</sup>	テ <sup>ッ</sup>	ト <sup>ッ</sup> ト <sup>ウイ</sup>		ト <sup>ッ</sup>	テ <sup>ヤウ</sup> テ <sup>ヤッ</sup> テ <sup>ヤフ</sup> テ <sup>ヨッ</sup>	テ <sup>ヤッ</sup>

入声韻は陰声韻・陽声韻に比べて数が少ないため、明確な傾向を述べるのがさらに難しい。それでも、舌面の高い“i-”で半濁点付き表記が見られる点は、陰声韻・陽声韻と共通である。

## おわりに

『新語書』は字書ではないため、全ての音節を網羅するものではなく、用字には偏りがある。そのため、大まかな傾向を述べるにとどめる。

日本語において、無声音／有声音の対立は弁別的機能を持つが、無声音における無気音／有気音は弁別的機能を持たない。その点で、日本人にとって無気音／有気音の区別は難しいものと言えよう。上述の②について言えば、無気音の字を有気音として聞き取り、③では有気音の字を無気音として聞き取った結果ということである。ただし、舌面の高い“i-”や“u-”では、無気音・有気音の違いを問わず半濁点付き表記が見られるが、それより舌面の低い“o-”や“e-”では清音表記が多く見られる。以上の点から、舌面の高さ＝口の開きの大きさが、無気音／有気音の聞き取りに影響している可能性が考えられる。

『新語書』において、基本的に無気音／有気音の区別なくどちらも清音で表記される中で、舌音の一部に半濁点を用いた仮名表記が見られるのは、部分的とは言え、無気音／有気音の有意な対立を意識した結果である。ただ、実際の使用状況を見ると、半濁点付き表記が有気音を示していると断定するのは難しい。これはむしろ、『新語書』の成立・編集過程という観点から考えるべき問題であろう。

日本人が無気音・有気音の判別をする場合、おそらくある程度の慣れや訓練が必要である。文字として記録するのであれば尚更である。総督府関連の資料としての作業であれば、総督府内部で共有されている研究成果を活用するであろうし、最終的には表記の統一を図るはずである。一方、新語書に見られる仮名表記は、一音に複数の表記が対応し、清音表記や半濁点付き表記の対応関係も曖昧である。その点から見れば、『新語書』は総督府関連の書籍とは別系統のものと考えてるのが穏当である。

山村2020で、ゼロ韻尾音節の仮名表記について、『新語書』と『用語（広東語）』を始めとする、台湾総督府関係の刊行物七点との間に見られる違いにつ

いて考察した。その結果、両者の間に明確な違いが見られたこと、その違いから見て、『新語書』は総督府関係の資料と別系統のものであると判断できる、と述べた。本稿の結論も、また同様である。

現在、『新語書』の字音体系の整理作業が進行中であるが、声母・韻母の体系等の総合的な報告は別の機会に譲りたい。

## 註

- (1) 台湾に居住する客家人の多くが広東からの移住者であったため、日本統治期の台湾における客家語は「広東語」と呼ばれた。従って、この時期に使用される「広東語」という名称は、今日一般的に言うところの広東語（広州語）ではないことに留意する必要がある。これは、香坂順一が「本冊子の「広東語」とは臺灣に於ける所謂「広東語」ではなく、廣東省城語即ち「廣州語」たることである。臺灣に於ける「広東語」は、實は「客家語」であつて、支那方言の系統から言ふならば別な一系に屬する。この點誤解のない様にして戴きたい。」（『広東語の研究』緒言）と述べていることから分かる。
- (2) 羅濟立2007c, p. 1
- (3) 台湾では一般に「台語（台湾語）」と呼ばれる。また「閩南話（閩南語）」と呼ばれることもあるが、比較的中立的な名称として「ホーロー語」の使用が増えているため、本稿では「ホーロー語」と表記する。「ホーロー」は「福佬」「鶴佬」「河洛」等の表記があるため、「ホーロー」とする。
- (4) 菅向榮『標準広東語典』「凡例二」で、補助記号を付した仮名を「符號假名」と称しているので、本稿もこれに従う。
- (5) 富田 1999, p. 160
- (6) 彭馨平, p. 67~68
- (7) 羅濟立 2007c, p. 2
- (8) 『広東語辞典』は縦書きのため、引用文中のアンダーラインは、原文においては全て右傍線である。
- (9) 「籐」は『広韻』には収録されていない。『集韻』では徒登切で、「藤」と同音字である。

参考文献・資料

- ・菅向榮, 1933, 『標準廣東語典 附 臺灣俚諺集 重要單語集』, 臺灣警察協會
- ・臨時臺灣戸口調査部, 1905, 『明治三十八年 戸口調査用語』(外地國勢調査報告 第五輯: 台湾總督府國勢調査報告 第十二冊「明治三十八年 戸口調査用語 土語・廣東語」, 2000, 文生書院)
- ・臨時臺灣戸口調査部, 1905, 『明治三十八年 戸口調査用語(廣東語)』(外地國勢調査報告 第五輯: 台湾總督府國勢調査報告 第十二冊「明治三十八年 戸口調査用語 土語・廣東語」, 2000, 文生書院)
- ・臺灣總督府, 1931, 『臺日大辭典』(1983, 『台湾語大辭典』, 国書刊行会)
- ・臺灣總督府, 1932, 『廣東語辭典』(1993, 『廣東語辭典』, 国書刊行会)
- ・北京大学中国语言文学系语言学教研室編, 1989, 『汉语方音字汇』, 文字改革出版社
- ・遠藤雅裕, 2016, 『台湾海陸客家語語彙集 附同音字表』, 中央大学出版社
- ・黄雪貞編写, 1997, 『梅县话音档』(現代汉语方言音庫), 上海教育出版社
- ・香坂順一, 1942, 『廣東語の研究 附常用文字聲音字典』, 臺北高等商業學校調査課
- ・頼文英, 2020, 『語言接觸下客語的變遷』, 國立中央大學出版中心
- ・李榮主編, 1995, 『梅縣方言詞典』(現代漢語方言大詞典・分卷), 江蘇教育出版社
- ・羅濟立, 2007a, 「日本統治初期の客家語仮名遣いについての一考察 —— 「廣東語」『臺灣土語叢誌』の同字異注を中心に」, 『東吳外語學報』24期
- ・羅濟立, 2007b, 「『廣東語會話篇(1916年再版)』の同字異注について —— 声母を中心に」, 『台灣日本語文學報』22號
- ・羅濟立, 2007c, 「『語苑』から見た日本人による台湾客家語の学習研究 —— 資料の内容と性質を概観」, 『地域文化研究』No. 5
- ・羅濟立, 2011, 「日客語對訳『廣東語辭典』の音韻とその特徴」, 『東吳日語教育學報』36期
- ・中川仁監修、羅濟立著, 2019, 『『語苑』にみる客家語研究(日本統治下における台湾語・客家語・蕃語資料 第2卷)』, 近現代資料刊行会
- ・彭馨平, 民國100(2011), 「日治時期台灣的客語教材研究—以《廣東語集成》為例」, 國立台灣師範大學台灣文化及語言文學研究所碩士班學位在职進修專班碩士論文
- ・富田哲, 1999, 「日本統治時代初期の台湾總督府による「台湾語」の創出」, 『國際開發研究フォーラム』11
- ・温昌衍, 2014, 『广东客闽粤三大方言词汇比较研究』, 中国社会科学出版社

- ・山村敏江, 2019, 「『日本広東学習新語書』及び『明治三十八年 戸口調査用語 (広東語)』所収の符号仮名 ( 1 )」, 『神田外語大学日本研究所紀要』第11号
- ・山村敏江, 2020, 「『日本広東学習新語書』及び『明治三十八年 戸口調査用語 (広東語)』所収の符号仮名 ( 2 )」, 『神田外語大学日本研究所紀要』第12号
- ・山村敏江, 2021, 「『日本広東学習新語書』及び『明治三十八年 戸口調査用語 (広東語)』所収の符号仮名 ( 3 )」, 『神田外語大学日本研究所紀要』第13号
- ・山村敏江, 2022, 「『日本広東学習新語書』及び『明治三十八年 戸口調査用語 (広東語)』所収の符号仮名 ( 4 )」, 『神田外語大学日本研究所紀要』第14号
- ・山村敏江, 2023, 「『日本広東学習新語書』及び『明治三十八年 戸口調査用語 (広東語)』所収の符号仮名 ( 5 )」, 『神田外語大学日本研究所紀要』第15号
- ・袁家驊等, 1983, 《汉语方言概要》, 文字改革出版社
- ・周振鶴／游汝傑著、内田慶市／沈国威監訳, 2015, 『方言と中国文化』, 光生館

#### ウェブサイト・資料

- ・教育部 臺灣客家語常用詞辭典  
(<https://hakkadict.moe.edu.tw/cgi-bin/gs32/gsweb.cgi/login?o=dwebmge&cache=1698603588838>)
- ・教育部 臺灣閩南語常用詞辭典 (<https://sutian.moe.edu.tw/zh-hant/>)
- ・中央研究院語言學研究所 客英大辭典查詢  
(<https://minhakka.ling.sinica.edu.tw/bkg/hakyin/>)
- ・新北市客家語文館 (<https://www.hakka-language.ntpc.gov.tw/bin/home.php>)
- ・行政院客家委員會全球資訊網 (<http://www.hakka.gov.tw/>)